創作

豆まきの夜

鈴木正子

豆まきの日にはどこのうちでも豆をまきますね。

夕方になると、あちらのうちからも、こちらのうちからも、

「福はうち　おにはそと」

という声が聞こえてきます。

その豆まきの晩のことでした。街かどの電信ばしらによりかかって一匹のおにが泣いていたのです。

「えーん　えんえん」

それは青いおにでした。空のお月さまはさっきから、だまってそれを見ていらっしゃいました。なかなか泣きやまないので、

「どうしたの」

ってお月さまはとうとうお聞きになりました。

おにはすると泣きながらこういいました。

「僕、泣き虫おになんだ。だけどこんやはおいだされちゃったんだ。タア坊のおなかの中にいたんだけど、豆まきの豆にやられちゃったんだ。えーん　えーん。」

「ほほうそれは気のどくに」

とお月さまはちょっとお笑いになりました。

「どれどれ、タア坊はどんな顔をしてるかな。」

お月さまは細い目をしてタア坊の家の中を、のぞいて見ました。いつもタア坊はたいへんな泣き虫なのです。ちょっところんだって、すぐ泣くのです。でも泣き虫おにを追いだしたタア坊はもうけっしてあしたから泣かないでしょうよ。さむい朝だって手がつめた

いなんていって泣かないでしょうよ。
お月さまは、
「ああよかった。よかった」
とおっしゃいました。
「どけどけどけ」
何だかまっくろいものがとんできて泣き虫おにをドーンとつきとばしました。泣き虫おにはまた、
「えーんえん」
と泣きました。
「何だ〳〵そんなところに立っていてじゃまじゃあないか」
黒いおにはぷんぷんおこっていいました。
「ケン坊のおなかの中にいたけんかおになんだぞ。だけどもうだめだ。豆がいたくっていられやしないや。」
黒いおにはどんどん足をならしておこりました。
「ほほう、こんどはケン坊か。」
お月さまはほそい眼をしてケン坊の家の中をのぞきました。
ケン坊はけんかがだいすきでした。よく友だちとけんかをします。女の子もいじめます。
家ではおとうとのフウちゃんとおもちゃのとりっこをしてけんかをします。
でもこんやはそのケン坊が、フウちゃんと汽車をはしらせてなかよく遊んでいます。
「かして?」とおとうとがいうと、「うん」とケン坊はすぐ汽車をかしてあげました。
「よしよし、けんかおにがいなくなったからな。」
お月さまは大きな声でおっしゃいました。
「ああ、さむいさむい」
そこに、こんどは黄いろい、おにがやってきました。ぶるぶるぶるぶる　ふるえています。
「どうしたの」
赤おにと黒おにには黄いろおにのそばに行ってききました。
「あたしね、ミイちゃんのおなかの中にいた病気おになの、だけどね、いたくって　いたくって。」
「あれ、きみも豆にやられたのか。」
と二匹のおには顔をみあわせていいました。
お月さまがほそい眼でごらんになると、ミイちゃんはかぜをひいてねていました。
でもきのうまでは熱があって顔がまっ赤だったのにこんやはだいぶよくなっていました。
「お母さんのおっしゃることをきいてよくねていたからね。それにこんやは豆まきだし。病気おにもとうとうおいだされちゃった。」
とお月さまはおっしゃいました。
夜がふけると街かどの電信ばしらのまわりには、一匹、二匹、三匹、四匹といろいろなおにが、あっちからこっちから集ってきまし

た。

泣き虫おに、けんかおに、病気おに、そうそうそれからいばりんぼうのいばりおに、それからよくばりおにも。タア坊、ケン坊、ミイちゃんところのおにのほかに、シン坊、トシちゃん、チイちゃんのところにいたおにもいました。

「さあ、これからどうしようか。」

と黒いけんかおにがみんなをあつめていいました。

「またもといたところにもどろうか。」

と青い泣き虫おにがいいました。

「でもまた豆をぶつけられるもの。山へにげて行こうや。」

と黄いろい病気おにがいいました。そこでみんなはとうとう山に逃げていくことにきめました。

「それじゃあ早くいこう。」

と一・二・三でおにたちは山にむかって走りだしました。寒い寒い夜ふけのまちをどんどんにげました。

お月さまは空からそれをほそい眼でごらんになりながらアッハッハとお笑いになりました。

おにをおいだした子どもたちはどうしたかな？　きっと、もう静かに静かにねてしまったことでしょう。

豆まきの夜のおはなしもこれでおしまい。

終

（群馬大学付属幼稚園）

幼児の劇あそび集

幼稚園における劇あそびは、幼稚園教育の理論が確立するにしたがい、幼児のあらゆる生活の綜合として、ますますその価値が認められてきております。

この見地から、本研究会でも、早くからこれが研究に着手してまいり、その結果を先年、「幼児の劇あそび集」として出版いたしましたところ、皆様の御好評を得てたちまち品切れとなり、永らくお待たせいたしましたが、このたびこの改訂が漸く再版になりましたので、ここにお知らせ申し上げます。

本劇あそび集は、二十四篇あり、みな本研究会員が研究脚本化したもので付属幼稚園児に実施して非常に善ばれたものばかりです。

取材については

○幼児たちのよろこぶ童話の中からとりあげたもの……浦島太郎・舌切雀　など
○幼児のあそびの中よりとりあげたもの……幼稚園ごっこ・動物園　など
○自然や社会環境の中からとりあげたもの……花の子ども・おやすみなさい・ひよこのさんぽ　など
○体育的なあそびを意図してつくったもの……仲よし　など
○行事をとりいれたもの……クリスマス・おひなさま　など

三才児に適したもの、四才児向きのもの、年長によいものなど学期ごとにそれぞれ数篇ずつとり合せてあります。

あまりに専門的にならず、ほどよいしろうとの味をもつことに意を用い「幼稚園の劇あそび」として皆様におすすめしてもよいと自任いたしております。

お茶の水女子大学付属幼稚園内
幼児教育研究会

〔四六判二一〇頁　頒価二五〇円　送料三六円〕
〔申込先き　幼児教育研究会
（東京都文京区大塚町お茶の水女子大学付属幼稚園内）